

べっぴの文化財 №.16

——朝見焼特集号——

- 朝見焼の調査
- 神嘉十と供紋焼
- 遺跡と遺物について

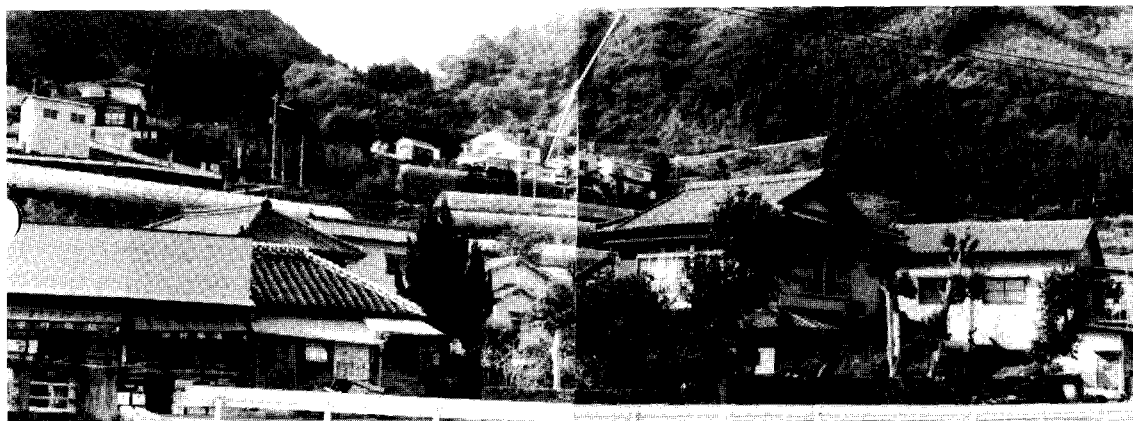


てんびんの台 (神恒彦氏蔵)

別府市教育委員会
別府市文化財調査委員会

朝見焼の調査

豊田文一



朝見川右岸の景

1. 現地調査

市文化財調査委員会は、昭和59年度事業の一環として「朝見焼」の資料収集と記録保存をすることになり、2月16日調査をおこなった。

調査には、後藤武夫、安部巖、豊田文一が参加した。対象としたところは、

- 朝見3丁目1-7 神恒彦氏蔵遺物
- 朝見2丁目18-17 神登氏蔵遺物ならびに神嘉十墓地
- 朝見2丁目9 八幡朝見神社境内の朝見焼遺跡

}どであった。
神恒彦氏は、朝見焼の陶工が誰であるかを研究され、「工人中の代表格とされる人は、丹波国の美上友七であること」を確かめた方で、調査の苦心や現地調査の結果を詳しく説明してくれ、さらに朝見焼の窯で使用した「てんびんの台」(2個)についても調査の便宜を与えてくれ研究上の大きな手掛りを得た。

神登氏は、朝見焼の創始、経営に大きく貢献した神嘉十(明治42年12月2日没)の孫に当る方だが、ここでは神家製蔵品の平皿13面、神嘉十墓地などの調査をさせていただいた。神嘉十墓地内には「くもんやき」が追納されていることがわかり、きわめて効果的な研究ができた。

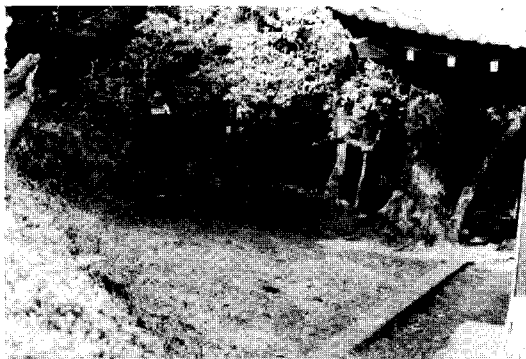
朝見焼窯跡は、神登氏、神恒彦氏の案内で現地をたずね散乱遺物の採集、窯跡の確認などをおこなった。この遺跡については、今後再調査の必要を痛感した。なお、神登氏・神恒彦氏は、朝見地方では「大野晴明氏・糸永辰雄氏・田内音市氏・糸永文雄氏・八幡朝見神社・加藤

昌弘氏・大野久氏を始め、かなりの人が朝見焼を持っている」と語ってくれた。

2. 写真撮影

写真撮影は、59年8月の初めと8月末、二度にわたっておこなわれた。これは梶原大治氏の献身的な協力により、見事な写真ができ研究を深めることができたことに対し心から感謝している次第です。

.....
なお、調査がおわって痛感することは、「朝見焼の研究はこれからだ」ということです。この冊子が、今後の朝見焼研究のために、いささかなりとも参考になれば幸いです。



朝見焼窯跡(八幡朝見神社境内)

神 嘉 十 と 供 紋 焼

後 藤 武 夫

1. 神嘉十について

朝見焼窯元、創始者神嘉十源正嘉は、朝見八幡宮神官神氏一族の分家系統。神氏の一族の内には神家(じんが)6軒、畑(ハタ)8軒がある。嘉十は神家の一家で神社裏の上畑に居住して神社の祭りには奉仕してきた。

朝見神社の神官家は、建久7年大友能直が豊後国主、鎮西奉行として豊後に入国した時、鎌倉八幡宮の分神を奉持して鎌倉から下向して来たという。

嘉十は天保5年11月10日大分県速見郡別府村732番地、神勘兵衛とその妻マキの間に生れた長男である。嘉永6年4月20日、妻ヨネ、天保7年4月10日生れと結婚、安政2年、嘉十が20歳の時、長男総太郎が生まれた。総太郎は病弱であったので家は三吾が相続した。

神嘉十は別府で始めて登り窯を造って陶器を焼いた人である。朝見神社の境内に仕事場をつくり朝見焼を焼いた元祖であり窯元である。(神家文書)-(昭和60年)

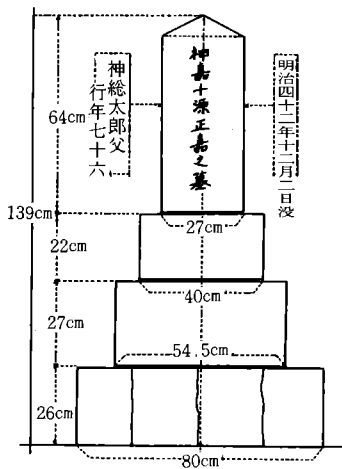
嘉十が最初窯を設置した場所は、神社裏といわれているが、上、上畑ともいわれていて、さだかではない。

二度目には本格的な登り窯を造って水路を造り水を引き作業場にしたり朝見神社横、絵馬殿、神楽殿の南側であった。ここは、南陽を受けて陶器の乾燥に適な場所である。窯場は、山から掘出した原土を置く広場が必要であり、原土を粉末にして搗き、それを水こしにかけて、自然乾燥にするには、約1ヵ月は日数を要する。又用水は欠かせないものだ。それだけに窯場選びに苦勞している。それに神社参詣の人のためにも、絵馬殿の横に設

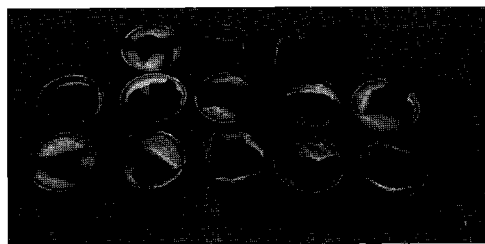
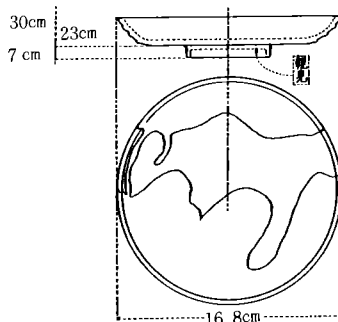
置したことは、ときの朝見八幡宮の神官と宮総代の協力と同意がなければ出来ない事である。延長200に及ぶ用水路設置も氏子総代の同意で着工したものと思われる。

特に神社にとって重要な絵馬殿の横で火をたく登窯の設置であるから、神官の同意が必要である。一説に依れば、神官の最も親しい神官に緒方村(緒方町)の鹿山神社の神官がいた。その神社の境内で焼いているのが『小宛』(おあて)焼という評判のよい焼物があった、これヒントを得て、神嘉十に進めたとも言われている。

その時の神官は誰であろうかと神官裁許状で調べて見たら、『豊後国速見莊八幡宮神主源正保当社祭禮6日、晦日、10月8日、12日、1日、泣令可着衣冠者神道之如件、安政5年6月11日、神祇管領長上三位卜部朝臣』となっている、神出羽正(守)正保の時代であることが判明した。出羽正(守)正保の時に年号の改元があり、元治元年となっている。元治元年は甲子の年である。在家でも家を建て、荒神かまどの修理、大黒天を刻む、お墓を建てる、何でも良い年の風習で目出度い年。ところがこの年は国内は騒然とし、その年の大きな事件を調べてみると、①池田屋騒動、②蛤門の変、③幕府長州征伐、④佐久間象山害死、等があり維新前夜ともいわれていた殺伐の時代であったから、画は南画が喜ばれ、陶器は素朴なものが喜ばれていた時代であった。



神嘉十墓の実測図



朝見焼 (神登氏蔵)

こうして嘉十は朝見と銘を入れた陶器を焼いて朝見の名物となっていたが——明治15年、陶工船石恵助の死に直面し、その妻おりんも再婚して去ったので、朝見焼の窯も多々は造れなくなっていたとは古老の話である。

その後何かの事情もあって某氏2人と共同窯となり、佐賀、肥前、唐津、丹波方面の陶工職人をやとって製造を続けていたが、その頃から朝見焼の本当の釉流しの色はないと画家の森川豊三氏の言った言葉を思い出す。

こうして神嘉十は朝見焼を造ったが、おしいかな、明治42年12月2日、76歳の長寿を全うして速見郡別府村73番地で死亡した。

2. 陶工職人船石恵助と妻おりん

神嘉十が登窯を造り陶器を造ることを思いついたのは、安政の頃だった。船石恵助という、小石原焼の職人夫婦が別府村朝見に来たことに始まる。船石は玖珠郡引地村の出身、妻おりんは福岡朝倉郡小石原村の出身、妻おりんは、子供の頃から轆轤を蹴り、陶器を作る窯元に奉公していた。たまたまそこで働いていた玖珠郡引地村から来ていた職人の恵助とよい仲になり結婚して男の子を産んだが、戸籍上では早世している。恵助は腕前はよいが神経痛が時々出て轆轤が廻せぬような事があるので、役所に廃職を願い出たが小石原を支配する役所から認められなかった。仕方なくおりんを連れて夜逃して玖珠に帰って来ていた。(玖珠、中村に住む親戚談)

当時朝倉郡を支配していたのは筑前藩主の黒田公、黒田藩では小石原に働く陶工職人の他藩に流出することをきらって厳しく取締っていたためであるといわれる。

船石夫婦は病気の療養と、妻おりんの仕事を求めて別府村に来て朝見の神嘉十を知った。嘉十は恵助の陶工職人であることを知り、おりんの仕事の世話をしてやった。

私は農家の手伝い、冬は神社の庭はきまで世話をした。この恵助が陶工職人である事を知って陶器をつくる気になったのが嘉十。始めは炭焼き窯程度の小さい山小屋を神社裏に建て、最初造ったのは、実用的な生活用品の深皿と茶碗だった。船石は陶土を見つけ廻っていた。陶土は鉄輪の向山(カンスハタ)、乙原の山、湯山等にも出掛けて行った。妻のおりんも嘉十と共に新設の登り窯で朝見焼を造ったと、神登氏宅の文書にある。(昭和40年)

恵助はその後神経痛が重くなり倒れて死亡した。おりんは再婚して速見郡朝日村小倉の平山某の所に行った。

(大野鉄一氏隣、現、鉄輪・金子荘社長)その後平山氏も病死したのでおりんはまた再婚した。速見郡北杵築村大序平の郷社番人某氏である。そこでおりんは72歳で死亡し墓も同所に残っている。晩年はしあわせだったという。

朝見焼はどこの系統であるかとよく問われることがあるが、小鹿田焼によく似ている釉の流しに小鹿田系だろうと思えるのは無理もない。宝永2年、小石原焼の陶工が小鹿田皿山に招かれて造ったのだ。いわば別府の朝見焼と陶工が同じ小石原陶工であり、姉妹の関係にある。

3. 神嘉十の墓から出た供紋焼

昭和40年11月17日、当時観光ぶれす新聞社の記者、後藤清人氏(現、今日新聞社編集局長)から、『水源地の工事現場の墓下から、皿と家紋の焼物が沢山発掘されている、調査に行ってみませんか』と連絡を受けて早速、同氏と共に工事現場の調査に行く事にした。

そこは別府市が浄水池(水源地)の拡張工事をしている所で、別府市上、上畑417番地の神登氏の所有している墓地だった。その中の一つ、『神嘉十源正嘉之墓』がある。この墓の下から深皿16枚、小皿破片多数と各家の家紋を焼付けたものが珍らしく250個以上掘出されていた。その時私は、この墓の故人は何をしていた人であろうかと思ひ入念に墓の実測から調査を始め、写真撮影も行って墓の周辺の遺物にも配慮した。

この墓は総高1尺39分、基礎石三重から成る立派な墓石で、墓の周辺には一族の墓も多数あった。

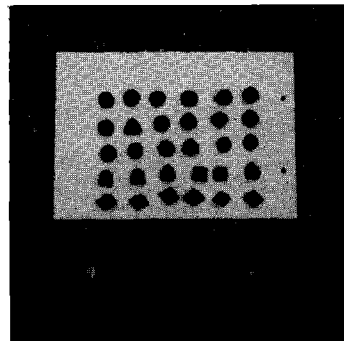
この発掘品を見て、『アッ、これは朝見焼である』と直感することが出来た。但し数百箇もあるこの紋焼は何であるのか私には解らなかつた。私は小紋焼も実測調査して、古陶器研究の専門家に調査を依頼することにして、帰宅早々、兵庫県芦屋市芦屋町153番地に居住されている乾山の研究で著名な古陶器の評論家・山田多計治先生に電話でお尋ねした。先生は、『供紋焼が発掘されたのは全国でも珍しい、今迄京都と九州・唐津の2ヵ所が発見されている。いずれも墓の移転でした』と。

以下先生から御教示うけた事の要領を説明すれば——

『お尋ねになった紋焼は、それは供紋焼(ぐもんやき)という焼物で、故人の生前の徳を慕って門弟達が、師の供養のためにささげる、いわば一字一石の大乗妙典塔の供養と同じ意味のものです。その人は陶匠か、窯元さんと言う事が証明されますネ』といわれた。

そこで神嘉十の墓から出た家紋をつぶさに調査した結果、その家族は、大野、神、船石、美上、小柳、武田、佐藤、それに三ツ巴、二ツ巴のものがあり、不明のものも多くあった。これは窯元に捧げた『供紋焼』である。

墓の下から出た朝見焼16枚は現在、神登氏が保存しており、供紋焼は全部移転先の神嘉十の墓下の納骨堂に納めてある。



神嘉十の墓から出た供紋焼

朝見焼の製品

安部 巖

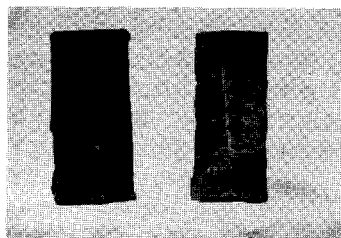
朝見焼は、朝見川中流右岸で二期にわたって焼かれたという。その第一期は、江戸時代中期末「鮎返り窯」で焼かれたものであり、第二期は、明治30年代になって八幡朝見神社の南側斜面を利用して焼かれたものである。

しかし、第一期の鮎返り窯については、その史料にとぼしく、結論的な結果を出すことはできない。朝見焼についての研究は、これからだと言える。

以下、別府の民窯で焼かれた民芸品・朝見焼についてその概要を記し研究の手掛りとしたい。

1. 江戸期の朝見焼 (江戸時代中期末)

鮎返窯朝見焼は、江戸時代中期末、朝見川の支流鮎返川の左岸で焼かれたという。経営は朝見3丁目、糸永文男氏の祖であったと伝えられ



江戸時代の朝見焼(糸永文雄氏蔵)

ている(糸永常一氏談)。糸永家には当時焼かれたという2個の(2個ともほぼ同型同大)の花瓶が残されている。

その一つは、底部の外形13cm、高さ25cm、上部口径12cmの花瓶で、胎土は粗い粘土で造られ重厚な作品である。

焼窯の所在は、さきに記した鮎返川の左岸で、今は水田になっているところである。水田付近から昭和23年2月16日てんびんの台が発見された。今でも焼土や器物の



江戸時代の朝見焼窯跡付近(鮎返川左岸)

破片などが僅かに出土する。本格的な調査をすすめ位置を確認しておくことが必要であろう。

2. 明治期の朝見焼

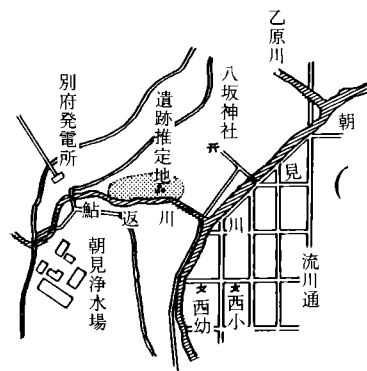
(1) 発祥の背景

ここで言う「朝見焼」とは、明治35~36年(1902~1903)ごろ、八幡朝見神社南隅の民窯で焼かれた陶器のことである。これは、さきに記した朝見焼(江戸期)とは全く別個のもので、経営上、技法上のつながりは全くない。明治になって亡びた藩窯にかわって誕生した民窯の所産であると言いきよう。

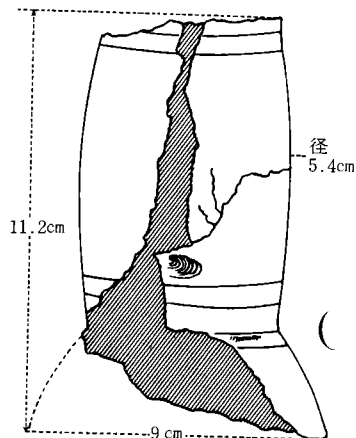
明治に入ってから別府は急速に

温泉観光都市としての歩みを続ける。明治3年(1870)2月着工した別府築港と海上交通路の整備。温泉浴場の増改築。陸上交通路の整備。宿泊施設の充実などをつぎつぎとおこない、明治30年代には、おもしろおきれもせぬ大分県下第一の観光都市になりあがっていた。

このような時期に、かつて大分県一等警部をつとめ、のち伊予の菊池行造と豊州電気鉄道の布設を企画した平塚恰(ゆたか)が土産品の生産を思いついた。明治30年代になって、別府一大分間の交通量を調査し「別府特産の焼物を造り売り出せば、別府発展の一助ともなり、また金にもなる」と考えた。早速朝見の有力者神嘉十と相



朝見焼窯跡付近の図(江戸時代)



焼窯用てんびんの台

談し、「朝見焼」として売り出すことにした。

(2) 焼 窯

焼窯は、八幡朝見神社の境内、現能楽殿の西側斜面に登り窯式の構造だったと言うが、今は遺構を留めない。

能楽殿新築にかかわる基礎工事のとき、構造物、遺物、石材、破片など悉く石垣の内側に埋めこんだという。

焼物は、丹波黒井焼系の作品を主とし、茶器・食器・花瓶・徳利・湯呑・平皿・深皿・香炉・線香立・火鉢・土鍋等々多岐にわたって造られた。

陶工は、兵庫県氷上郡春日町黒井2425番地に現住されている美上稔氏の祖父美上友七で、平塚恰・神嘉十・菊池行造などの経営に協力して窯業に当り多くの作品を造り出した。もちろん作品は、美術品ではなく民芸品だった。

焼土の入手は、朝見焼の経営にとって最大の難関であった。適当な粘土を他の地方で購入し輸送することは容易にできない時期だったから、初めは鮎返川左岸斜面の粘土を採取し使用した。しかしこの粘土は作品にひび割れを生ずる傾向があったため商品になる作品を造り出すことができなかった。

そこで、別府市内各地の粘土を採取し試験した結果、最終的には、南立石本村（現立石本町）の粘土を鮎返り粘土に混入して使用したものが一番よいという結果になった。その後朝見焼にひび割れを生ずることはなかったという（佐伯素堂氏の教示による）。

販売は主として神嘉十が受け持った。各地に積み出したり、小売店に委託したりしただけでなく、八幡朝見神社の参道横で戸板の上に陳列して販売したりした。

当時、鳥潟豊の経営する朝見病院が盛況をきわめていたこと、神社の参拝者がきわめて多かったこと、更に朝見の町が枝郷・東山・庄内方面に通ずる交通上の拠点になっていたことなどから多くの製品が売り出されたという（別府今昔・神登氏の教示などによる）。

しかし、明治34年（1901）正月26日には陶工美上友七が死亡したためし

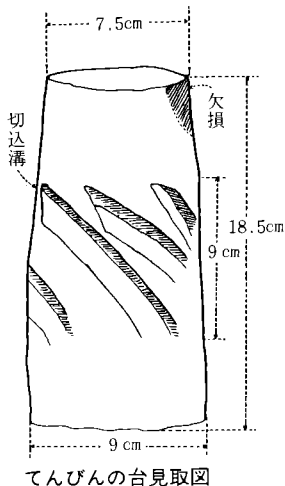
だいに衰退し、遂に廃窯となった。

（田内音市氏による）廃窯の時期は不明である。

大正期に入って浜脇で朝見焼再興の動きがあったというが、その実態は今後の調査に期待したい。

(2) 田内房吉と美上友七

朝見神社窯の陶

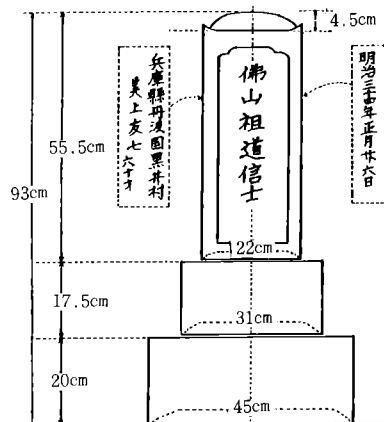


工美上友七は丹波国の人である。彼は漂然と生国を出て別府に來り、朝見3丁目（元別府村朝見）田内房吉（田内音市氏の祖）の宅に寓居した。毎日の焼窯勤務はここから通勤したという。田内家では毎日弁当を持たせ、かれの製作作業を側面から援助し、朝見焼の発展に貢献した。

しかし、かれは程なく（約2年半程後）病気になるに逝去した。房吉はかれの葬儀を鄭重にとりおこない、位牌を自分の家に祀るとともに遺骸を自家の墓地（現原町、流川通16丁目付近）に埋葬し墓を建て永くとむらうことにした。

ところが、大正9年（1920）になると、別府町都市計画事業の区画整理で田内家の墓地は永糸家の墓地とともに野口原墓地に移転することになった。このとき房吉は陶工美上友七の墓も共に移し、これまで通り田内家の墓として毎年供養してきた。

友七の墓は、総高93 $\frac{1}{2}$ 寸、基礎一重は高さ20 $\frac{1}{2}$ 寸、二重は高さ17.5 $\frac{1}{2}$ 寸、塔身は55.5 $\frac{1}{2}$ 寸で凝灰岩に刻まれている。基礎と塔身はやや石質を異にする。基礎二重は、或いは異石かも知れない。



美上友七の墓実測図（野口原墓地）

なお、塔身正面には、

佛山祖道信士

側面には、

明治三十四年正月廿六日

兵庫縣丹波國黒井村

美上友七 六十歳

と刻まれている。

3. 朝見焼の作品（明治期）

(1) 美上友七の作品（香炉）

イ、所蔵者 別府市朝見3丁目 田内音市氏

ロ、大きさ 総高14 $\frac{1}{2}$ 寸、径（最大部）11.8 $\frac{1}{2}$ 寸、高台（3個）7 $\frac{1}{2}$ 寸、

ハ、歴史 美上友七の作と言われる香炉（こうろ）。



香 炉

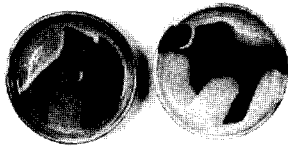
(2) 茶こぼし (建水)



茶こぼし

- イ、所蔵者 別府市上人ヶ浜町1-1 別府市美術館
- ロ、大きさ 総高8^釐、径(最大部)12^釐
口縁部外側径 9.5^釐
- ハ、歴 史 寄贈品、底部に「朝見」の刻印銘がある。
○建水(茶こぼし)…「建」は傾けて水をこぼす意。
点茶の際、茶碗をすすいだ水を捨てる。
(「広辞苑」)
○高台は、普通つけないが、ひび割れを防ぐため
つける場合がある。

(3) 神家小皿



小 皿

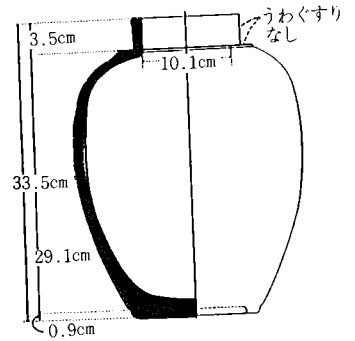
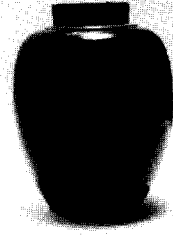
- イ、所蔵者 別府市朝見2丁目(上畑)神登氏
- ロ、大きさ 総高3^釐、径16.8^釐
- ハ、歴 史 この種の皿は神家に13面残されている。
「朝見」の刻印がある。

(4) 糸永家花瓶

- イ、所蔵者 別府市朝見3丁目6番 糸永文男氏
- ロ、大きさ 総高11.7^釐、中央部径7^釐
口径外側 8.5^釐、底部外径 8.7^釐
- ハ、歴 史 襲蔵品、糸永文男氏の祖父代から糸永家
にて使用されていたもの。

製作当時から田内家に襲蔵されているもので、今は仏壇に供えられ使用されている。3カ所にこまししの彫刻飾りがある。

(5) 茶壺 (ちゃつぼ)



茶 壺 茶壺側面図

- イ、所蔵者 別府市鉄輪東6 伊東健之氏
- ロ、大きさ 総高33.5^釐、径(最大部)26^釐
- ハ、歴 史 蒐集品、黒井焼系
口縁外側にうわぐすりのあとが見られず
構造上から茶壺であることがわかる。
5月に茶を入れ、錫で巻いて蓋をし、布
をかぶせて保存し、5ヵ月後10月に茶を
出して使用した。ほんとの茶の香りを出
すための容器は壺が一番よかった。

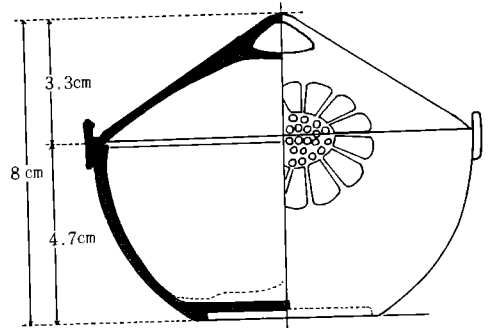
(6) 土鍋 (どなべ)



土 鍋

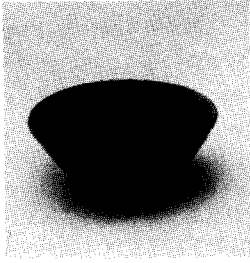
- イ、所蔵者 別府市鉄輪東6 伊東健之氏
- ロ、大きさ 総高8^釐
径(最大部)26^釐
- ハ、歴 史 蒐集品、丹波系
鍋焼きに使用、卵な
ど、食卓用、

ニ、実測図(現寸大)菊花模様入



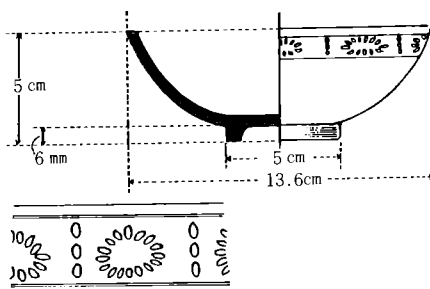
土鍋側面図

(7) 茶 碗



茶 碗

ニ、実測図

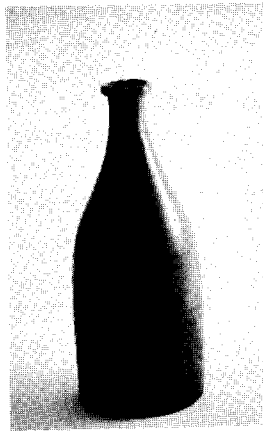


茶碗側面図と口縁部内側の模様

(8) 酒徳利 (3個)

イ、所蔵者
別府市朝見3丁目3-22
大野晴明氏

ロ、大きさ
大野氏は、朝見焼と称する徳利を3個保存している。1つ(A)は高さ22釐、径9釐、(B)は高さ26釐、径9.5釐、他の1つ(C)は高さ27釐、径10釐である。



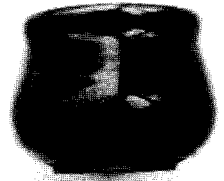
大野家徳利 (A)

ハ、歴 史 大野家に古くから襲蔵されていたものでともに灰白色である。

(9) 花瓶と建水 (茶こぼし)

花 瓶
イ、所蔵者 別府市朝見3丁目3-22 大野晴明氏
ロ、大きさ 高さ26釐、口径(外)11.7釐、底径(外)9.3釐、中央部径
底部に「朝見」の銘がある。

ハ、歴 史 大野家に古くから襲蔵されていた。



建 水

花 瓶

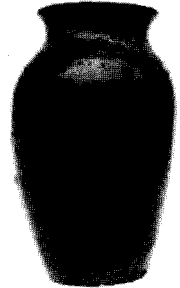
建 水 (茶こぼし)

イ、所蔵者 別府市朝見3丁目3-22 大野晴明氏
ロ、大きさ 高さ9釐、口径(外)10.8釐
底径(外)7.3釐、中央径12釐
ハ、歴 史 明治以来大野家で使用していたもの、伝世品である。

(10) 糸永家花瓶

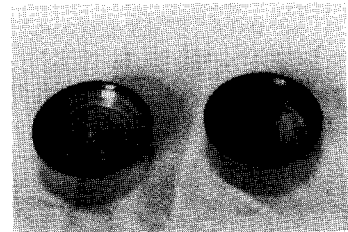
イ、所蔵品
別府市朝見3丁目14-2
糸永辰雄氏
ロ、大きさ
底部径9.5釐
口径(外)12.3釐
高さ27釐
底部に「朝見」の刻印がある。

ハ、歴 史
糸永家の伝世品で、糸永辰雄氏の祖父・糸永幸四郎氏が直接窯元から求め使用してきたものという。「朝見焼」初期の作品。



花 瓶

(11) 糸永家盃



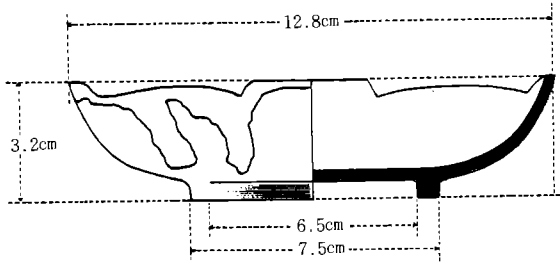
盃

イ、所蔵者 別府市浜脇2丁目11の3 松本昭太郎氏
ロ、大きさ 高さ3釐、口径(外側)7.4釐。

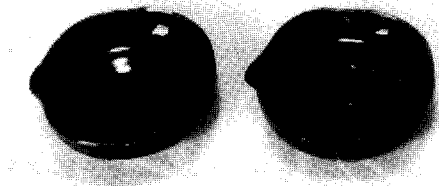
底に「朝見」の刻印がある
 ハ、歴史 直接窯元から出されたままのもので、まだ使用されていない。

(12) 松本家小皿ほか

イ、所蔵品 別府市浜脇2丁目11の3 松本昭太郎氏
 ロ、歴史 松本家には前掲盃(さかずき)のほかに小皿(A)・椀(B)・片口皿(C)などが保存されている。

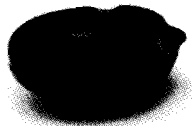


小皿(A)測面図



片口皿(C)

(13) 小皿



イ、所蔵品 別府市上原町3-14 安部巖氏
 ロ、大きさ 総高33^{mm}、径10.5^{mm}、底部に「朝見」の刻印がある
 ハ、歴史 丹波黒井系平皿で、昭和37年(1962)流川通、永井清一氏より譲り受けたもの。2個あり。朝見焼後期の作品で風雅さを求めたもの。

(14) 手提火鉢

イ、所蔵者 別府市原町5-3 加藤昌弘氏
 ロ、大きさ 総高18^{cm}、鉢部の高さ93^{mm}、直径(最大部)17^{cm}、口径外側16.3^{cm}、内側13.5^{cm}、底部径11.2^{cm}。
 ハ、歴史 襲蔵品、加藤昌弘氏の祖父栄太郎が使用していたもので、銘(刻印)はない。「朝

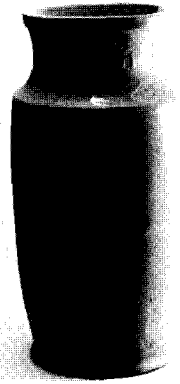
見で焼いた陶器だ」と言い伝えられている。朝見焼後期の作とみられる。



手提火鉢

(15) 大野家(久)花瓶

イ、所蔵者 別府市中島町1の29 大野久氏
 ロ、大きさ 総高39.6^{cm}、直径(最大部)20.5^{cm}、口径(外側)16.5^{cm}、底径17^{cm}。
 ハ、歴史 襲蔵品、大野久氏の祖父の代から使用されていたものである。



大野家花瓶

(16) 酒德利

イ、所蔵者 別府市中島町1の29 大野久氏
 ロ、大きさ 総高26^{cm}、直径(最大部)17^{cm}、底部径9.5^{cm}
 ハ、歴史 襲蔵品、上掲花瓶に同じ。

4. 陶工の確認について

陶工の確認については、これまで不明なことばかりだった。しかし、朝見3丁目神恒彦氏の調査によって確認できたことは何よりだった。以下、神氏の研究を記すと、

——神恒彦氏の調査記録——

『朝見焼私見(糸永家の陶器)』

……(前略)……現在朝見焼といわれるものは、明治32年頃から34年頃にかけて朝見八幡神社境内で、陶工美上友七さんが焼き、朝見上畑の一等登記官を停年退職した神嘉十さん夫婦が朝見病院前の鳥居の所で売っていたものである。

しかし「朝見」と銘打った陶器よりももっと古い、今より250年程前の朝見焼があったことを忘れてはならないと思います。

それは、朝見3丁目7番居住の糸永文男さんの先祖で274年前真光寺を建立した糸永平兵衛さんの時か、それより時代はすこし下がるが、225年前の糸永惣右エ門さんの後ではないかと思われる。

惣右エ門さんは、戒名を「飯元瑞雲玄光(宝暦8年正月入叡)」と言う。豪農で醸造業をしており、全にあかせて自分の持ち田、つまり河内川の上流迫田に窯をつくり陶器を焼かせていたものと思われる。用土は迫田の土を用いた。白気の粘土で小砂利がなく粘気の強い土で、糸永家の花瓶は勿論、日用調度陶器類まで焼かせた。今でも糸永家の家宝として現存する。

・明治の朝見焼

私は、子供のころ陶器などには一向に傾着なく、むしろ刀剣に非常に愛着を感じておりました。青年時代および壮年時代はひたすら働くことのみでしたが、昭和36年定年退官後、暇にまかせて家のガラクタ整理中に見つけ)元別府市役所水道課長石崎貞二郎さんが大分合同新聞の切抜帳の1冊を私の父に贈られた、題して「別府市上水道の歴史」の冊子をめくっているうちに、切抜記事の中段に、

『朝見病院のおかげで、付近もにぎわいだした。朝見神社の裏山で細々と仕事をしていた朝見焼の窯元では明治35年ごろまで人形も焼いて鳥居のところで売り出した。この朝見焼は、平塚恰が考案し、京都から来た三上という人が焼いたものを、上朝見上畑の実力者神嘉十という人が自分の家内に売らしていた』

という記事を見て泉都別府にも窯元があり、陶器が焼かれていたという誇りが頭の中に深く刻みこまれたのです。そんなある日老人会の先輩の田内音市さんと、いろいろな世間話をしていたところ、朝見焼の事に話がおよびましたが、そのとき田内音市さんが、

『私の父(田内音五郎氏)が元気なころ、陶工が私の家に寄寓しており、田内家から毎日朝見八幡の境内にある窯場に通っていた。職人は男女数名を使っていたが、陶工がなくなったとき、陶工の家族が不明であるため、葬儀はもちろん、死後位牌の面倒もみ、遺骨は田内家の墓地内に埋葬して今日に至っている。』

とのことで、早速鶴見原市営墓地内にある田内家の墓地に田内音市さんの案内でお参りしてみると、正面の田内



美上友七の墓

家累代墓の向って左側の1番奥に陶工美上友七さんの墓をみることができ、続いて田内音五郎さんと妻カツさんの墓がある。

この墓参りにより、陶工につき多くのことを発見したのであります。

戒名は「佛山祖道信士」で、俗名は「美上友七」ということが判明し、三上でなく美上であることが明瞭になり、朝見焼調査研究に1歩突き進んだ気持ちがある。

尚、墓石には「明治三十四年正月二十六日死亡、出身地、兵庫県丹波国黒井村」と記されている。

・美上友七の足あと

朝見焼の陶工は美上友七さんであり、墓標によると、兵庫県丹波国黒井村と判明した。

しかし、明治34年頃より83年も経ているため、地名も改正されていることと思ひ地名調査すると、丹波の国は兵庫県と京都府の一部地方であることが判明したので、各町村に黒井村と美上姓について照会状を出すことにした。

その手始めとして京都中郡丹波峰山町役場に照会状を出したが、1週間して同町役場より黒井村も美上姓も該当者なしの返信があった。

ついで、兵庫県篠山町役場に照会状を出すのが該当者なし。

次に、兵庫県氷上郡春日町役場に照会するに、次のような回答文がきた。要約すると、

『旧黒井村は、現在春日町黒井で、調査されている美上姓の在住者は世帯主美上稔で、住所は黒井2425番地である。美上稔方へ照会してみても…』とのことで、昭和53年7月28日、春日町黒井の美上稔さん宛に手紙を出したところ、美上稔氏より早速の返信で美上友七は当家の先祖であり、黒井焼の陶工として黒井焼の研究に来て、美上家の1人娘リエの婿養子として入籍した。

そのとき、家業が表具店だったので表具師として養父理七さんが仕込んでいた。

ところが、ある日仕事に行くといっって音信不通となると書かれていますが、それは今流行の蒸発だったのです。

私の調べたところでは、明治15年頃より明治32、33年頃までは空白ですが、その間諸国を遍歴し、窯元を訪ね陶器の研究をし、最後は別府に来て永住し、明治34年1月26日死亡。以来移り行く別府の繁栄ぶりを見ていることでしょう。

美上さんは、別府で短い期間陶器を焼き続けていましたが、その当時では珍らしい77歳の高齢で他界いたしました。

追て、美上友七さんは、京都市上京区法皇寺町2番地で天保13年8月6日生れです。

……………以上……………

以上が、神恒彦氏の調査記録である。尚、この稿作成に当っては、別府市流川通6丁目、別府高麗焼本窯元・佐伯素堂氏の教示によるところが大きかった。また写真撮影に当っては、梶原大治氏の協力があつたことを記して謝意を表します。



美上友七と妻リエの墓
(兵庫県氷上郡黒井 美上家墓地)

べっぷの文化財

— 第16号 —

発行 昭和 60 年 3 月 20 日
発行所 別 府 市 教 育 委 員 会
別 府 市 文 化 財 調 査 員 会
事務局 別 府 市 美 術 館
印刷所 大 野 印 刷 有 限 会 社